

言語と記号（二）

—— 範疇論の端緒（1） ——

中 島 聡・栗 栖 照 雄*

岡山理科大学工学部

*岡山理科大学非常勤講師

（1995年9月30日 受理）

I

西欧精神の学的な言語活動（エピステーメー・ロギケー）の歴史全体において、アリストテレスによって発見された「範疇（カテゴリー）」ほど数奇な運命をたどることになるものは他にはないであろう。「カテゴリー」〔拙論では以後一貫して「範疇」と呼ばず、そのアリストテレスにおける原義（述語されたもの）を尊重して「カテゴリー」と呼ぶことにする。なおカテゴリーそのものを問題にする場合は引用符に入れ、それ以外は引用符抜きで記述する。そしてここでは「カテゴリー」は、一般化した意義（等級、種類）においてではなく、あくまでもその本来の語義と西欧精神史におけるその変遷に即した意義において語られる〕は、西欧における精神文化の根底に居座ることによって、それを支えて推進する力となると共に、抜きがたいがを填めてきわめて偏った方向へと導く力となり、さらには、西欧の精神文化の限界を画する契機ともなるのである。したがって、西欧におけるエピステーメー・ロギケー全体において、この「カテゴリー」は、ある時は「神」の如く処遇されることがあるかと思えば、ある時はその嫡出の定かならぬ厄介な「私生児」の如くもて扱われることもある。現状はと言えば、いわゆる「新カント学派」特にバーデン学派のリッケルト、ヴィンデルバント、それに対峙する「現象学」のフッサール等による「カテゴリー」の新しい基礎づけと形成の試み以来、「論理学」の目覚ましい展開〔進歩とは言わないまでも、諸々の新種のエピステーメー・ロギケーの登場、即ち「実証論理学」や「分析哲学」、「言語学(Linguistik)」や「意味論(Bedeutungslehre)」、「記号論(Semiotik)」の整備と拡充、および技術的応用〕の陰で、「カテゴリー」はその名前か機能を変えること〔ハイデガーの「実存範疇」やN・ハルトマンの「存在範疇」〕を強いられた「漂泊者」となっているように思われる。少なくとも、「カテゴリー」に対するカントの思い入れを汲んでいるように見える「新カント学派」や「現象学派」の試みを成功裏に受け継いだ洞察、言い換えれば、ヘーゲルによる「カテゴリー」の「弁証法」への「野放し」に抗して、カントの設けた「カテゴリー」使用の諸制約〔カントにあっては、「カテゴリー」そのものよりもその「使用の制約」こそ「カテゴリー」の本質に内属する決定的な要素である〕に忠実に

帰服するような発展的洞察は、今のところ見られない。

このような現状は早くからその兆しはあった。ニュートン、ライプニッツ、デカルト等による「哲学」の側からの「近代数学（微分・積分，解析幾何）」の基礎づけは、イギリス経験論の成熟と相俟って、「計算理性」支配の時代状況を準備し、逆に「哲学」をそれにこびりついた「形而上学的残滓」を払拭する方向に導く契機となった。カントの「理性批判」はなお、「形而上学」の「聖域」を有限な人間理性の横暴な侵犯から守護するという構想のもとにあった。この守護された「聖域（形而上学）」は、その認識不可能性のゆえに、「カテゴリー（純粹悟性概念）」の「経験的（相対的）使用」への制限のための尺度となり得たのである。この「聖域」を守護すべきカテゴリーが「残滓」と見なされるようになるのは、ドイツ観念論による「カテゴリー」の形成基盤（絶対我）への回帰と、その「形而上学」的領域への超越的（絶対的）移行への情熱であった、と言える。この情熱に由来する「越権」は、「数学的理性」に基盤をおき、「形而上学」に対して徹底的に懐疑的であった新来の「冷静な」「科学者」たちを、「哲学」そのもからも遠ざける結果を招来した。「哲学」は「論理学」に取って代わられる。この時一緒に、既にドイツ観念論において無力化されていた「諸カテゴリーは経験的使用においてのみ本来の力＝制限力を発揮するのであって、その超越的使用は逆に諸カテゴリーのそれ自体としての意義を相対化する、すなわちこの使用においては諸カテゴリーは、弁証法的に $\dot{\text{変}}\dot{\text{化}}\dot{\text{す}}\dot{\text{る}}\dot{\text{も}}\dot{\text{の}}$ と見なされる）」「カテゴリー」は、「哲学」における無意味な「残滓」、むしろ「形而上学」の領域に属する「残滓」と見なされて、「論理学」の領域から追放されるか、せいぜいよくて“未発達な論理学”の化石として珍重されるくらいの扱いとなる。しかし現在、一方で、上述したように、「現代論理学」とは別な視点から「カテゴリー」を考察する思想家もいる。いわゆる「先験的＝超越論的哲学」に関与する思想家は、「論理学」に専念することもそれを等閑に付することもできないが、同時に彼らは基本的に「カテゴリー」と「形而上学」、或いは「存在論」に関わらざるをえない。

本編では、こうした思想家に触れながら、フレーゲに始まり、カルナップ、B・ラッセル、ホワイトヘッドが基礎を築き、ヴィトゲンシュタインによって展開される「現代論理学（論理哲学）」へ省察の眼差しを向ける前に、伝統哲学から「現代論理学」への $\dot{\text{歴}}\dot{\text{史的}}\dot{\text{橋}}\dot{\text{渡}}\dot{\text{し}}$ として、その両方に顕在的、潜在的に深く関係している「カテゴリー」について若干の考察——それも歴史的な変遷に対するきわめて大まかな概観〔ただし、アリストテレス思想を整理して後世の受容の準備をしたストア派の思想、及び「カテゴリー」が神学的思考において決定的な役割を演じた中世スコラ思想には、ここでは触れられない〕に限定されるが——をめぐらすことにする。考察とはいっても、単なる報告にすぎないが、それは却って「カテゴリー」の運命のその数奇さを理解するのには、都合がよいと思われる。

II

我々は以下の考察を進めるにあたって、その重要な端緒であり、素材として根底に置かれ、現代もなお最も広い意味で〔言語学、論理学のみならず形而上学まで含めた〕西欧エピステーメー・ロギケーの決定的な尺度であり続けるものとして、やはりアリストテレスの「カテゴリー」論を最初に提示しておく必要がある。その尺度としての意義を認識するためにやや長文にわたるが、彼の『カテゴリー論(KATEGORIAI)』を引いておこう。彼の「カテゴリー」の十全な理解のためには、いわゆる「オルガノン(ORGANON)」に編入されている諸著のみならず、『形而上学』、『自然学』等の論述を参照する必要があるが、ここでは「カテゴリー」そのものの後世への影響が見て取れる範囲で、『カテゴリー論』にだけ絞る。

第二章 言われるものども(legomenon)のうち、或るものは結合(symplekê)によって言われ{=命題 λόγος: 説明方式}, 或るものは結合なしに言われる。(1 a 16-18)

第三章 或るものが基体(hypokeimenon)としてのあるものについて述語される時に、述語されるもの(katêgoroumenon)について言われるものは、どれもみな基体についても語られるでだろう。例えば、人間は或る特定の人間について述語される、しかし動物は人間について述語される。従ってまた或る特定の人間についても動物は述語されるだろう。何故なら或る特定の人間は人間であり、動物でもあるからである。異なった類(genos)であって互いに他の下に配されないものどもの種差(diaphora)もまた、種(eidos)の上で異なっている。……しかし互いに他の下に配される類の種差は〔種の上で〕同一であることを妨げない。何故なら上位の類は自分の下位にある類について述語される、従って述語されるものの種差であるだけのものは、またそのすべての基体のそれであることになろうから。(1b10-25)

第四章 どんな結合にもよらないでいわれるものどものそれぞれ意味するものは、或いは実体(ousia)か、或いは「何かこれこれだけ(poson)」〔量〕か、或いは「何かこれこれ様の(poion)」〔質〕、或いは「或るものとの関係において(pros ti)」〔関係〕か、或いは「或る所で(pou)」〔場所〕か、或いは「或る時に(pote)」〔時〕か、或いは「位している(keisthai)」〔体位(状態)]か、或いは「持っている(echein)」〔所持〕か、或いは「為す(poiein)」〔能動〕か、或いは「為される(paschein)」〔受動〕かである。(1b25-29)

第五章 実体——それは最も本来的な意味で、そして第一に実体といわれ、また最も多く実体であると言われるものは、何か或る基体について言われることもなければ、何か或る基体のうちにあることもないもののことである、例えば或る特

定の人間、或いは或る特定の馬。そして第二実体と言われるものがそのうちに属するところの種とそれらの種の類とである。例えば或る特定の人間は種としての人間のうちに属し、そして動物がその種の類である。だからそれらのもの、例えば人間や動物は実体としては第二と言われる。

上述のこと〔1b10-15〕から明らかなことは、基体について言われるものどもの名称や定義もまた、基体について述語されるのは必然であるということである。

(2a12-22)

以上のアリストテレスの「カテゴリー」についての論述は、彼の「形而上学」的思索〔或いは存在論〕と密接不可分に関連しあっている。このことも勘案して、上記の事柄をアリストテレスに即して理解するために以下の彼の説明を付け加えておこう。

「量」は、〔1 a〕分離的なもの（数・言葉）、〔1 b〕連続的なもの（線、面、物体〔立体〕、時、場所）、〔2 a〕それの中にある部分が相互に位置を持つもので、それから構成されているもの（線その他）、〔2 b〕そのような位置を持たないものから構成されているもの（数、言葉）、といったような区別がある（第六章）。「関係的」なものには、「他のものの～」、「他のものとの関係において」、「他のものより」といったものがあり、それによって「性状、状態、感覚、知識、位置」等が述語される（第七章）。「性質」には、①性状・状態、②自然的能力、③受動的性質と受動性（受け入れること：白さを受け入れて白い）、④形やそれぞれの物の周りにある姿（直・曲、三角・四角等）、といった区別が考えられる（第八章）。なお第十二章では、後代、特に形而上学の展開において重要な意義をもつことになる「より先(proteron→priori)」の次の五つの区別について論じている：①時に基づいて、②存在の随伴に関して、③順序に基づいて、④慣わし（尊重するもの・愛するもの）、⑤事柄と言論の関係において、真であることは「事柄があるか、あらぬか」が「より先」である。また十三章では、「類」は「種」に対して、存在の随伴に関して逆にならないから、常に「より先」であることが強調されている。本編においては我々は特に②と⑤の意義に注目する必要がある。十四章では、有名な「運動〔転化〕」の六つの種、生成、消滅、増大、減少、変質、場所による変化〔移動〕を述べている〔本質的には、「生成・消滅」、「増大・減少」、「変質」、「移動」の四つの種類にまとめられる〕。

III

二十世紀初頭、「哲学的基礎概念」と「自然科学（数学を含めた）的基礎概念」が、その方法論的立場をめぐって厳しい検討にかけられ、それらの対立の渦の中で相互の交流が一気に根底にまで達した。この渦の中から現代論理学が、アフロディテの如く誕生するのである。その渦は、カントはもとより、ライプニッツやデカルトの方法論的原理へと流入するスコラの形而上学と論理学の流れを辿って、遠く古代ギリシアのアリストテレスにまで

遡ることができる。その渦を巻きおこす交流の一翼を担った代表的思想家の一人がE・カッシーラーである。彼は『実体概念と関数概念(Substanzbegriff und Funktionsbegriff)』において、「論理学の側から数学の基礎概念への橋渡しを得る」(同書・まえがき)という構想のもとに、種々の「個別科学の概念形成の形式をあらためて跡付ける試み」をなすのである。その後付けの試みの最初の過程で、上述のアリストテレスの「カテゴリー」が先ず検討に付される。そこで彼は次のように総括する²⁾：

アリストテレス論理学の特有の捉え方は、彼の存在概念の特有の捉え方によって条件づけられている。なるほどアリストテレス自身は、存在の種や意義をはっきり区別しているし、また、存在を様々な下位の種に対して区分することを跡付け説明することが、彼の〈カテゴリー論〉の本質的課題であった。したがって、彼もまた単に判断における関連を指し示すにすぎない存在を事物的実在から、つまり、概念的総合の存在を具体的な主語の存在から、はっきり区別した。しかし、このようなかなり厳密な分節化の追求にもかかわらず、実体概念の論理的優位は、いささかも揺らいでいない。現存する所与の諸実体に即してしか、多様な存在の規定を考えることができず、もともと存在するにちがいない確かな事物的基体(substrat)に即してのみ、存在一般の論理的・文法的種が、その実在上の手掛りと根拠とを見出だすことができるとされる。量と質と空間規定と時間規定は、おのおの独立にあるのではなく、それ自身で存立する絶対的な現実の諸性質にすぎないのである。とりわけ「関係」の範疇は、アリストテレス形而上学の基礎学説によれば、従属的で下位の地位を強いられている。関係は本来の本体概念(Wesensbegriff)とちがって非自立的であり、本体概念に対して、その真の「本性」には抵触しない事後的で外的な変容を加えることしかできない。しかしこのことによって概念形成に関するアリストテレスの理論は、理論としておびただしい変化をこうむりながらも不変に保たれた一つの特徴的な特色を獲得したのである。それ以降、〈事物〉のその〈性質〉に対する範疇上のこの基本的関係は指導的観点でありつづけ、関係的规定は、ただなんらかの仕方の媒介によってある主語ないし複数個の主語の状態に解釈しなおされるかぎりでしか、考察されなかった。形式論理学の教科書では、関係(Verhältnis)ないし関連(Beziehung)は、概して概念の「非本質的」徴表に数えられ、したがって、概念の定義においてはなくてもすませられるとされているということのなかに、この見解を見て取ることができる。ここにはすでに、きわめて重大な方法上の分岐が登場している。……〈事物概念〉と〈関係概念〉の間にどのような価値関係を認めるかに応じて、〈論理学の典型的な二つの基本形式{実体と関係}〉が分かれゆき、その両者は、とりわけ現代科学の発展途上で、お互いに対立するに至ったのである。

III

カッシーラーのこうした「論理学」に主に焦点を当てたアリストテレス・カテゴリー論の総括に並べて、「形而上学」と「存在論」に焦点を当てることによって現代の「論理学」および「言語学」の基本的な傾向の対極に位置づけられるものとして、M・ハイデガーのカテゴリー理解を紹介しよう。カッシーラーは両傾向の中間に立つものと見なされよう。現代のエピステーメー・ロギケーの「哲学」的潮流は、ほぼこの三つの潮流から——現状では両極（「論理学」と「存在論」）が生産的に交流することがきわめて困難な状況にはあるが——成っている。ハイデガーは、カテゴリーの普遍的本質に関して次のような存在論的意義を強調する。それは或る意味で、アリストテレスの「言語」や「陳述」についての顕在的な思想的意図をも超えた「視点」に立っている。ハイデガーはここで、カテゴリーの原義に鑑みて、その「前哲学的」意義と哲学的用法を区別して論じている。先ずその「前哲学的」意義に関して次の記述を挙げておこう³⁾。

katêgoria および katêgorein は kata と agoreuein の結合から生じている。agora とは、会議のような閉鎖的な集会とは区別された公開の集会を、そして協議や裁判、市場や交易の公開性(Öffentlichkeit)を意味する。アゴレウエインは、公に語ること、或ることを公開性において、そしてそのために告示すること、要するに公開すること(offenbar machen)、である。カタは、上から或るものを見下ろして、の意であり、或るものへの注視(der Blick auf etwas)を意味している。したがってカテーゴレインは、明確に或るものを見やりつつ、そのものがまさに何であるかを公にし、公開することを意味する。かかる公開(Offenbarmachen)は、それが一つの事柄——総じて存在者——に向かってそれが何であるかを目しつつ語りかける(auf das hin ansprechen)、またそのものをこれこれに存在しつつあるものと名指すかぎりにおいて、常に言葉を通して行なわれる。語りかけ及び披瀝(Herausstellen)のこの様式、すなわち言葉による公開の様式は、公開の裁判において或る人に対し、これこれの罪を犯したのは彼であるという告訴がなされる場合に、とりわけ顕著な形で現われる。語りかけつつ披瀝するという様式は、公開の告訴において最も効果のある、したがって最も常套的な手段である。それゆえカテーゴレインは、特に〈告訴する〉の意味での披瀝的語りかけを意味する。しかしその際も、基本的意味としての公開の語りかけというニュアンスは保たれている。まさにこの意味で、カテーゴリアという名詞が用いられるのである。

つまりカテーゴリアとは、或る事物にそれが何であるかを目しつつ語りかけること、しかもこの語りかけによって、いわば存在者自体がまさにそれ自体であるところのものとして語へと至る、すなわち照射され(Vorschein)公開の開かれた場

にもたらされるように語りかけることである。この意味での一つのカテゴリーが〈机〉という語であり、或いは〈箱〉、或いは〈家〉、〈木〉等々の語であり、同じく赤い、重い、薄い、勇敢なという語——要するに或る存在者をその特性(*das Eigene*)を捉えて語りかけ、その存在者がいかに見え、いかに存在するかを告示する(*kundgeben*)すべての語である。一つの存在者がまさにそのものとして現われる相(*Aussehen*)を、ギリシア語では *to eidos* または *hê idéa* という。カテゴリーとは、或る存在者にその相の特性を目してなされる語りかけ、つまりきわめて広い意味での固有-名詞(*der Eigen-Name*)である。……

IV

このようなカテゴリーの前哲学的な原義の理解に基づいて、ハイデガーは、アリストテレスがカテゴリーを自分のテオリアとエピステーメー(フィロソフィア)のオルガノンとして強制的に使用する所以を嗅ぎ取ろうとするのである。ここでは特に、カッシーラーとハイデガーにおける「実体」、「基体」、「主語」、*ousia*, *hypokeimenon*, *substanz*, *substrat*, *subiectum* 等の意味の理解と解釈の相違に注意すべきである。カッシーラーがそれらを、おおよそ文法的・論理的な意味に比重をおいて論じているの対して、ハイデガーは、意識的にそうした意味を排除しつつ、あくまでも「存在論」の視界の中で論究しようとしている。彼にとって事柄上、「存在論」が「論理学」より「より先」なるものである。そこには、ハイデガーの「存在と存在者の存在論的差異」の視点が働いている。カテゴリーは、「哲学＝形而上学」の次元においてはあくまでも「存在」のカテゴリーであって、「存在者」のカテゴリーではない。彼の理解では本来 *ousia* は現前性 *Anwesenheit* であり、*hypokeimenon* はその *ousia* の中に既に横たわるものである⁴⁾。

ところで、形而上学としての哲学は、或る強調された意味において「カテゴリー」を論ずる。「カテゴリー論」および「カテゴリー表」が論じられるのである。たとえばカントは、主著『純粹理性批判』において、カテゴリー表は判断の表から読み取られ演繹されうること説いている。この哲学用語としての「カテゴリー」とは何を謂うのであろうか。哲学的標語の「カテゴリー」は、前哲学的なカテゴリーの語といかに関連するのであろうか。

アリストテレスはカテゴリーの語を、或る事物に対するその相を目しての語りかけという慣用的な意味でも用いたのであるが、このアリストテレスが最初に、そして続く二千年にとって決定的な仕方で、カテゴリーという前哲学的な語を、一つの哲学的名称にまで高めたのであり、今やこの語は、哲学が自らの本質にふさわしくその思惟を通して省察すべきものを指す名称となるのである。カテゴリーの語のこの昇格は、真正な哲学的意味で遂行される。というのも、或る突飛

な、恣意的に考案された意味、よく言われるところの〈抽象的な〉意味が、この語にこっそり差し込まれるわけではないからである。この語自体が持つ言語上の、また事柄上の精神が、一つの可能的な意味、ときには必然的に別の、そして同時により本質的な意味を示唆している。

我々が「そこの或るこのもの(dieses etwas da)」(この「戸」)を戸として語りかけるとき、この戸として語りかけることのなかには、すでに一つの他の語りかけが含まれている。いかなる語りかけであろうか。その語りかけを我々は、「そこの或るこのもの」が戸として語りかけられると述べたとき、すでに名指している。我々が名指されたものを窓としてではなく「戸」として語りかけうるには、思念されたものがすでに「そこの或るこのもの」として——このそれ自体で特定の仕方¹で現前するものとして(als dieses von sich her so und so Anwesende)——示されていなければならない。我々が思念されたものを「戸」として語りかける以前に、そして語りかけることによって、それが一つの「そこの或るこのもの」である——つまり一つの物である〔が在る〕(ein Ding sei)——という暗黙の語りかけ(Anspruch)がすでに響いている(ist gefallen)。もし我々が、名指されたものをすでに前以て一つのそれ自体で存立している物(ein für sich bestehende Ding)として自分と出会わしめなければ、我々はそれを戸として語りかけることはできないであろう。それが一つの物であると語りかけること(Anspruchung)(カテゴリー)が「戸」として語りかけることの根底にある。「物」は戸よりも基本的かつ根源的なカテゴリーである。それはつまり、名指された存在者がいかなる存在性格において示現されるか、すなわちそれが一つのそれ自体で存在するものであること、アリストテレスが言うように、それ自体に発し独立に存在する或るもの——ソノツドノコノモノ〔個物〕(ein Etwas das von sich her für sich ist—tode ti)であることを述べる「カテゴリー」、語りかけることである。

第二の例を挙げよう。我々は、この戸が褐色である(そして白ではない)ことを確証する。我々が名指された物を褐色として語りかけうるためには、我々はそれを色の点から眺めなければならない。しかし物の色彩が、そのつど他でもないこの色彩として我々の目に映るのは、その物がすでに前以て特定の性質を具えたものとして我々の前に置かれているときだけである。もしその物がすでに、そして同時にその性質という点で語りかけられていなければ、我々はそれを断じて「褐色」として、つまり褐色を帯びたもの、これこれの性質を具えたものとして語りかけることはできないであろう。

「褐色」という前哲学的な語りかけ(カテゴリー)には、その基礎に、しかもそれを担う根拠として、「これこれの性質を具えている」と語りかけること、「性質(Beschaffenheit)」, poiotês, poion, qualitas のカテゴリーが横たわっている。

「質(Qualität)」のカテゴリーに比して第一に挙げた「物」のカテゴリーは、それがあらゆる質の根底になければならないもの、根底に横たわるもの(das Zugrundeliegende), hypokeimenon, subiectum 《substantia》を名指すことによって、顕著なものである。「実体(Substanz)」, 質, そしてさらには量, 関係が「諸カテゴリー」であり、つまり存在者に向かって、それが一つの存在者として何であるかという点を目して語りかける卓越した語りかけである⁵⁾。

V

「カテゴリー」に関して、その創造者（或いは発見者）であるアリストテレスのなまの発言と、その幾多の変遷の後に出現した二つの合い異なった視点からなされる解釈を取り上げた。このように「カテゴリー」に対する理解と解釈は、時代によって異なった位相から、おおよそ対になった二つの視点が競合して現われる。本編ではもう二組みの意見を取り上げることにする。近いところでは、本編Ⅰで述べたごとく、新カント学派のリッケルトと現象学派のフッサールのそれがあるが、その前に先ず、西欧エピステーメ・ロギケーの展開の歴史の中で、最も根本的な位相において対峙し合った二人の思想家の解釈を紹介することにしよう。この二人の思想家の考察によって、「カテゴリー」は西欧エピステーメ・ロギケーの全体を巻き込んで予想もつかない方向に導く中心的な力になるのである——そしてやがてその中心的な力は自ら引き起こした渦の中にその姿を隠してゆくのであるが——。その二人とは勿論カントとヘーゲルに他ならない。既に周知の思想ではあるが、「カテゴリー」の宿命を際立たせるために、敢えて彼らの詳細な論述を引こう。

カントの精神と考察はどこまでも「批判」の領域にとどまる。これが彼の人格であり、彼が哲学に関わる最深にして真正な唯一の動機である。このことを忘れてはならない。その「批判」精神によってのみ、西欧伝来の「形而上学」の「誤謬推理(Paralogismus)」, 「アンティノミー(Antinomie)」, 「神の存在の存在論的・宇宙論的証明不可能性」を看破し、「理性(ratio)」および「理念(Idee)」の知的越権を咎め、人間的「認識能力」の限界（認識が思惟・悟性と直観・感性および形式と内容の二様の二つの源泉とその総合に由来するものとする）を画定するというカントの努力は、アリストテレスのギリシア的精神に他の誰よりも深く触れることができたのである。人間的認識の有限性の指摘は、彼の場合、単に論理的・方法論的意義を有するだけではない。それは言わば彼の「批判」という精神的生命そのものの表現である。したがって、次に引用する彼の論述を適切に理解するためには、その論述の根底に「批判」精神が続いていることを同時に理解しなければならない。記述「より先に」「批判」があるのである。このことを見逃さなければ、彼のアリストテレスのカテゴリー論に対する厳しい見方にもかかわらず、その底に或る二人に共通した心情が続いていることを読み取ることができる。その共通性を理解する鍵は、カントの「経験（認識、判断）」概念である。カントの有名な言葉「しかし、我々の認識がすべて経験を

もって(mit)始まるにしても、そうだからといって我々の認識が必ずしもすべて経験から(aus)生じたのではない」は、カテゴリーの本来の、すなわちアリストテレスの理解する意味に通じるものである。しかしここで、いづれにせよ認識の基準として提示される「経験」には、カントの表現で言えば、認識の二つの源泉の「総合」にまつわる深い謎（根源的秘密）が露呈しているのであって、人間的認識（経験）の有限性を徴表するその謎を通して、カントの批判精神とギリシア精神（アリストテレスのカテゴリー論）は呼応していると言える。このカテゴリーの「総合」は、カントの場合ひとまず「先験的統覚」の統一機能に遡源されるが、その遡源が徹底されればされるほど感性的直観との乖離を引き起こし、それらを繋ぐために「構想力」によるカテゴリーの「感性化」（図式論）という、また「知られざる根」に行き当たるのである⁶⁾。実は、人間的認識の有限性のカント的な根拠は、結局はこの「構想力」の根の不可知性の自覚にあると言ってよい。カントの「批判」精神はこの根から養分を受け取っているのである。ヘーゲルはこの根を断ち切って、「構想力」を、そして同時にカテゴリーを、「弁証論」の放縦（弁証法）に委ねるのである。ともかく先ず、カントのカテゴリーに関する「批判的な」記述を見てみよう⁷⁾。

〈カテゴリーは経験の対象に適用され得るだけであってそれ以外の物の認識には使用せられ得ない〉

それだから対象を思惟することと、対象を認識することとは同じでない。即ち認識には、二つの要素が必要なのである。その第一は〔純粹悟性〕概念(カテゴリー)であり、これによって一般に対象が思惟される、また第二は直観であり、これによって対象が与えられる。……ところで我々に可能な直観はすべて感性的直観である(感性論による)、それだから対象一般に関する思惟は、純粹悟性概念が感官の対象に関係せしめられる限りにおいてのみ我々の認識になり得るのである。感性的直観は、純粹直観（空間および時間）であるか、さもなければ経験的直観、即ち空間および時間において直接に感覚によって、事実的になものとして表象せられるところのものの直観であるかのいずれかである。我々は純粹直観の規定によって対象のア・プリオリな認識を持つことができる（数学において）。しかしこれは、現象としての対象の形式に関してだけのことである。従ってこの場合には、この直観形式において直観せられねばならぬような物が存在し得るかどうかはまだ決定されない。それだからおよそ数学的概念は、それ自体だけではまだ認識ではない。数学的概念は、純粹な感性的直観の形式に従って我々に現実的に示されえ得るような物の存在を、我々が前提する限りにおいてのみ、認識となり得るのである。空間および時間における物は、この物が知覚（感覚を伴う表象）である限りにおいてのみ、従ってまた経験的表象によってのみ、我々に与えられる。それだから純粹悟性概念は、ア・プリオリな直観に適用される場合ですら（数学のように）、このア・プリオリな直観が——従ってまたかかる直観を介して悟性概念が、経験的直観に適用される限りにおいてのみ、認識を与えるのであ

る。故にカテゴリーは、経験的直観に適用せられ得なければ、直観によっても我々に物の認識を与えない、——換言すれば、カテゴリーは経験的認識を可能ならしめるためだけのものである。かかる経験的認識は経験と呼ばれる。故にカテゴリーが物の認識に使用されるのは、物が可能的経験の対象と見なされる場合だけに限るのであって、それ以外には物の認識に使用され得ないのである。

VI

フィヒテは、カントの謙虚に過ぎる人間精神理解に我慢ができなかった。カントにおける「自我」の窮屈な働きは、フィヒテ自身の「自我意識」を緊縛しているように感じたであろう。「理性」の働きとして自由な「理念」形成へと開放されているはずの「自我」が、一方的に制約だらけのものとして「惨めな姿」において描きだされるのを、黙って見過ごすわけにはいかなかった。カントも人間は「本性上、形而上学」へと促されている存在であることを認めてはいる。カントはこの人間本性をただ「実践的」領域においてのみ許容する。それは、上述した彼の「経験」という制約（たとえそれが能力として認められているにせよ）の故である。人間理性は、その理念の妥当性をただ「経験」によって証明する以外にない。そうした証明への自覚的志向（意志）が「実践理性」に他ならない。この証明は、あくまでもア・ポステリオリである。「実践理性」においてア・プリオリに保持されているのは、やはり再び「内容なき形式」だけである。結局「自我」の内に本有されているのは、「単なる形式」に過ぎないことになる。カントは人間の「知識（叡知）」をかかものとして認めることで満足したかもしれない。しかるに、このような経験の此岸に沈湎する「理念」は、正しい意味で「理念」と言えようか、自らの存在の妥当性（真理）を「経験の後から」追っ掛けながらあげつらうような知は、果たしてその本来の能力と尊厳に見合った知と言えようか。否、もはや理念でも知でもない。人間の知は、その本性上の「形而上学」的能力をこそ、たとえそこに論理的には深い矛盾を招来しながらも、注目しそれをこそ発揮すべきではないか。フィヒテは情熱をもってそう考え⁸⁾、「自我」の深淵（謎）の中に降りたち、精神（形而上学）の無限の高处を望もうとした。こうしたフィヒテの「情熱」を理解をもって観察しながら、ヘーゲルはそれを壮大な「論理学」の構想のなかに取り入れるのである。この「論理学」の構想は、ヘーゲルの思いとしては、その進行の過程の中にカントの「批判哲学」・「先験的〔超越論的〕論理学」の全体を「経験的に後にして」取り込むはずのものであった。この思いを彼は『大論理学』の中で次のように吐露している。因みにM・ハイデガーは、カントの「先験的〔超越論的〕tanszendental」のTranszendenzに形而上学(Metaphysik)のmeta-の意義を読み込み、経験におけるカテゴリーの機能（総合的統一）の「図式性」を「超越形成的」機能として理解することによって、ヘーゲルとは異なった立場から、カントの「カテゴリー」の「形而上学的」関与を認めている（『カントと形而上学の問題』）。

概念が悟性として有する形式的な地位は、理性の本質に関するカントの叙述の中で完成される。それで、我々は当然に、思惟の最高の段階である理性の中では、概念が悟性の段階においてはまだ持っている被制約性を失って、完全な真理に到達するものと期待した。ところが、この期待は欺かれる。カントはカテゴリーに対する理性の関係を単に弁証論的なものと規定し、しかもこの弁証論の結果を全くただ無限な無と見るために、理性の無限な統一もまた、思弁的な真に無限な概念の総合とともに、今言う始原をも失ってしまう。そこで理性はあの周知の全く形式的な統一、体系的悟性使用の単に規則的な統一となる。単に判断の基準であるべき論理学が、客観的な認識を産み出すための機関(Organ)と見られることは一つの誤用だとせられる。より高い力と、より深い内容とがそこに当然予想された理性概念は、もはやカテゴリーのような構成的なものを何一つ持たない。理性概念は単なる理念である。勿論この理念を使用することは一般的には許されるとせられるが、しかしすべての真理を全面的に開示するはずのこの叡知的本質 {魂・世界・神＝形而上学的内容} は、仮説以上のものと考えられるべきではないということになる。この叡知的本質は如何なる経験の中にも姿を表わすことができないから、これに即且向自的な〔客観的な〕真理に帰することは全くの恣意であり、無謀だというのである。——だが、叡知的本質が感性の空間的、時間的素材を欠いているという理由で、哲学が叡知的本質に対して真理を認めないなどということが一体、考えられてよいものだろうか⁹⁾。

西欧のエピステーメ・ロギケーの展開の歴史のなかで、「カテゴリー」が辿る運命のもう一つの位相は、「重要なのは内容である。……重要なことは主観性と客観性との区別では決してなく、そして内容は主観的であると同時に客観的なものである」¹⁰⁾と宣言したヘーゲル哲学の壮大な「無内容さ」が、十九世紀末にさしかかる時代の荒波によってその絢爛たる弁証法のメッキが洗い流されて、露呈したときに、発生する。「カントへ帰れ」とオットー・リープマンが叫んだのは1865年であった。この時から「カテゴリー」は、一方では、ヘーゲルの形而上学的試みとは異なった意味で過大な、それも世俗的な使命が与えられ(文化論・価値論・認識論・世界観学)、他方では、知性に巢食った出生の怪しい形而上学的残滓として徹底的にカテゴリーを排除する論理哲学(実証論理学・形式論理学・分析哲学)、という極端な思潮の中で漂流することになる。後者の作業におい排除される「カテゴリー論」に入れ替わる形で「記号論」と「意味論」が進出してくる。しかしこの両極端の間で、なおも「カテゴリー」の本来の有り様を模索して、カントに影響されながらも、その新しい意義の領域(存在領域論〈ハルトマン〉や現象学〈フッサール、M・シェーラー〉、実存論〈ハイデガー〉)に適用する試みがなされる。次号においては、いまなお途上にあるそういった試みの幾つかを紹介しつつ、アリストテレスの「カテゴリー論」との根源的な連携

を回復することによって、現代の「論理学」と「存在論」とを繋ぐ地中深く隠されている共通の根、すなわち言語と記号の本質生起を探ることにする。(以下次号)

註

- 1) Aristotelis Categoriae et liber de Interpretatione, recognovit brevis adnotatione critica instruit L. Minio-Paluello, Oxonii 1956. 『アリストテレス全集』 1, 「カテゴリー論」 山本光雄訳, 岩波書店.
- 2) E. Cassirer: Substanzbegriff und Funktionsbegriff—Untersuchungen über die Grundfragen der Erkenntniskritik, Verlag von Bruno Cassirer, Berlin, 1910. 『実体概念と関数概念—認識批判の基本的諸問題の研究—』, 山本義隆訳, みすず書房. 9~10頁.
- 3) M. Heidegger: Nietzsche II, Neske, 1 Aufl. s.71~73. なお引用訳文は藺田宗人訳(白水社)のものを筆者の責任において一部変更して掲載した.
- 4) ibid. s.406.
- 5) ibid. s.73~75.
- 6) Immanuel Kant: Kritik der reinen Vernunft, B. s.176. 引用文は篠田英雄訳(岩波文庫)のものをそのまま掲載した.
- 7) ibid. s.146.
- 8) 木村素衛著『フィヒテ』弘文堂書房, 第六章「カント哲学に対するフィヒテ哲学の問題史的連関」参照.
- 9) F. Hegel: Wissenschaft der Logik, 『大論理学』武市健人訳, 岩波書店, 下巻 23頁.
- 10) F. Hegel: System der Philosophie, 『小論理学』松村一人訳, 岩波文庫, 上巻 174頁.

参考文献

- 1) 今道友信著『人類の知的遺産』(アリストテレス)講談社.
- 2) M. Heidegger: Gesamtausgabe, II Abteilung; Vorlesungen 1919-44 B, 21, Logik, Frankfurt, (1976).
- 3) 高坂正顕著『カント学派』弘文堂.
- 4) 安藤孝行著『アリストテレスの存在論』弘文堂.
- 5) 藤井義夫著『アリストテレス』勁草書房.
- 6) 三木 清著『アリストテレス 形而上学』(大思想文庫) 岩波書店.
- 7) ルドルフ・カルナップ著『カルナップ哲学論集』永井成男他訳, 紀伊国屋書店.
- 8) K・ポパー著『客観的知識』森 博訳, 木鐸社.
- 9) 『世界の名著』(ラッセル, ウィトゲンシュタイン, ホワイトヘッド) 石本新他訳, 中央公論社.
- 10) A・エイヤー『言語・真理・論理』吉田夏彦訳, 岩波現代叢書.
- 11) E. Husserl: Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erster Buch, Nijhof, (1950).
- 12) ローゼンタール著『カテゴリー論』寺沢恒信他訳, 青木書店.
- 13) E・トゥーゲンツハット他著『論理哲学入門』鈴木崇夫他著, 哲書房.
- 14) W・ヴィンデルバント著『哲学概論』速水啓二他訳, 岩波文庫.
- 15) 永井成男著『分析哲学』弘文堂.
- 16) ワルター・シュルツ著『変貌した世界の哲学1』藤田健治監訳, 二玄社.
- 17) M. Heidegger: Gesamtausgabe, II Abteilung; Vorlesungen 1919-44 B, 63, Ontologie (Hermeneutik und Faktizität), Frankfurt, (1988).
- 18) M. Heidegger: Frühe Schriften, Frankfurt, 1972. Die Kategorien- und Bedeutungslehre des Duns Scotus.
- 19) M. Heidegger: Kant und das Problem der Metaphysik, 3 Aufl. Frankfurt, (1965).

Die Sprache und das Zeichen (Nr. II)

—— Der Anfang der Kategorienlehre (1) ——

Satoshi NAKASHIMA and Teruo KURISU*

Fakultät der Technik von der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama,

**Aushilfsdozent von der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama,*

Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan

(Received September 30, 1995)

Die Entfaltung der Logik und der Linguistik im Anfang des 20 Jahrhunderts hat mit dem Ausräumen der metaphysischen Aussagen aus der Philosophie angefangen. Diese ausräumende Arbeiten haben die überlieferten Kategorien und zugleich die Kategorie-funktion selbst ausgeschaltet. Dadurch ist die Versorgung der Nahrung aus der Philosophie (der Metaphysik oder der Ontologie). Hier zeigen wir die neuen Versuchen vor, die neuartigen Kategorien erforschen, um das Versorgung der philosophischen Nahrung wiederaufzubringen.